

# 反障害通信

20. 4. 18

93号

## コロナウィルスの感染症対策の論点整理(2)

### ——医療政策の中における感染症問題——

前回に続いての第2段、書き切れなかったこと、またその後考えて少し論考を深めたことを書き置きたいと思います。

#### (1) 医療崩壊という問題

なぜ、検査を進めないのかという時、医療崩壊が起きるからという答えるひとたちがいます。それに対して、出口をしっかり作って検査をしっかりしていくことだという応答がありました。すでに、韓国ではドライブスルー・ウォークスルー方式とかやっていて、アメリカ、ドイツでも導入していました。日本では、なかなかとり入れることをしなかったなかで、とうとう取り入れることを声明したり、検査を増やす増やすと、口先だけ言い続けていました。やっと今になって動き出すようです。それでも、さいたま市の保健所の所長が検査を少なくしたという発言をするなど、なぜかちっとも増えないのです。そもそもこの問題が起きる前に、医療がギリギリのところをやっていたところがあり、また、医療関係者も感染して疲弊している、すでに一部崩壊的な現状になっているのではないかと思います。コップの表面張力でギリギリのところまで水を垂らすと水はあふれ出すのです。どうして、医療がギリギリのところになっていたのかのとらえ返しが必要になります。そこにあるのは、医療の理念自体が崩壊していたのではないかということがあるのです。

#### (2) トリアージを避けるという論理とさまざま医療の理念の崩壊

さて、医療崩壊をさけるということで、とりわけトリアージをしなければならない事態を避けるということが言われます。トリアージというのは、大きな事故がおきて、医療体制が十分にとれないときに、誰を優先的にみるのかという選択が働くということです。これは一時的、局地的に日常的にも起きることで、そこに差別の論理を働かせない、医療の論理を貫徹していくことで、対処していく必要があるとは思うのです。それ以前に、トリアージを避けるということ自体に医療の論理があるのです。

ですが、実はもうこのコロナウィルスの問題が起きる以前に、いろんなところで差別の論理が働くトリアージがおきているのです。

そのひとつが、脳死臓器移植法の成立とその実施の積み重ねがあります。脳死はひとの死ではありません。脳死判定されたなかで、その後生き続けた事例、社会生活を送っているいくつもの事例が出ています。臓器移植するために、脳不全を脳死概念に変えたのです。それは、「いのちのリレー」などという意味不明のごまかしのなかで、まさにいのちの序列化ということが進んでいるのです。それは医療の理念自体の崩壊を意味しています。

問題はそれだけではありません。今、リビングウィルとかACPとか人生会議とかで、延命処置の差し控えとか停止のようなことが行われていること自体、国民健康保険制度の維持という名目での医療費削減の国策から起きてきていることではないかと思えるのです。

そのことに留まりません。現実に医療の現場では、トイレに自分でいけないひとはオムツを着け時間で交換していく態勢になっています。以前、医療ではないのですが、それに隣接する介護の講習の話を知ると、オムツの中で排泄をして、どんなに不快かを体験させるということをやっていたという話がありました。これは、もうなくなっていて、時間でオムツ交換が当たり前になっているのでしょうか？ これらのことは、まさに医療・介護の崩壊としかわたしには思えないのです。

### (3) 医療の理念の崩壊——感染研主導のクラスター対策

さて、テレビでなぜ検査が進まないのかという議論をしている過程で、政府の下に作られた専門家会議のメンバーの多くが感染研究所のメンバーであり、これは医療機関ではなく研究機関だというのはなしがありました。それで実は被爆二世であるわたしが想起したのはA B C Cのことで

A B C Cについて Wikipedia から

原爆傷害調査委員会 (**Atomic Bomb Casualty Commission**、**ABCC**) とは、原子爆弾による傷害の実態を詳細に調査記録するために、広島市への原子爆弾投下の直後にアメリカ合衆国が設置した民間機関である。

このA B C Cのなかには医療関係者もいたのですが、治療をせず原爆という兵器の効力の情報収集をしていたのです。なかには、医療をさせないでどうなるのかをみるという話まであったという話も出ています。なぜ、医療関係者がそのようなことができるのか、驚愕の思いがあります。感染研も多くは医療の資格をもつひとたちですが、感染を如何に抑えるかということでの研究者として立ち振る舞っているようです。とりわけ、水際作戦からクラスター対策ということで情報収集していたようなのです。

医療の現場にいるひとたちから、専門家会議の主流を占める感染研という研究機関が感染症対策に当たることに、医療の論理が働かないということでの批判が出ていました。感染症対策を感染者の数や死者の数をいかに少なくするかという論理で動くこと、ひとりひとりの一対一の目の前にいる患者を救うという医療の論理が働かなくなることへの批判が出ていたのです。実際、PCR検査を受ける基準ということが、外国から帰国したひと以外は、高齢者でなく慢性的な疾病をもっていないひとは4日以上37.5度が続くひと、高齢者や慢性的な疾病をもっているひとは2日以上37.5度続くひとという基準が長く生き続けていたのです。実際亡くなってからPCR検査を受けて陽性と判明したひとも出ていたのです。別に希望するひとみんなに受けさせろと言っているわけではありません。そこまでいければ勿論それがいいのですが、疑わしきは受けさせるというのが検査の基準のはずです。実際、「いつもにない重い倦怠感」(志村けんさん) や味覚・臭覚変異ということが症例として上がっていたのに、なぜ検査の基準を医療の論理で改め進めえなかったのでしょうか？ それはまさに医療の論理がきちんと働かない、医療の論理が崩壊した研究機関になっていた感染研がウイルス対策の中心にいて、クラスター対策を軸に動いていたからではないかと思えるのです。誤解のないように書いておきますが、別にクラスター対策と検査を拡げることは矛盾することではありません。加藤厚生労働大臣はテレビに出演して、なぜ検査を進めないのかという質問に、他の国と違って死者の数が増えていないから、とか答えていました。感染症対策は先手先手を打っていくというのが原則です。なにを言っているのか、指揮を執っているひとりがこんなありさまで、とうとう緊急事態宣言にまでいたりしました。

#### (4) 医療の歴史の総括の欠落

さて、二つ前の項の医療の理念の崩壊的現状や、前の項の感染症対策における医療理念崩壊の話を書いていて、わたしが想起するのは、731部隊の事です。中国で、捕虜や民間人を「マルタイ」と称してさまざまな人体実験を繰り返した石井隊長をトップにした部隊で、そのなかには細菌を使った実験もあったのです。この部隊は、アメリカ軍に資料を渡して戦争犯罪にはかけられず、戦後の日本の医療・薬科の人脈のなかに生き続けました。まさに、日本の戦後は、戦前・戦中のきちんとした反省なしに出発したということの象徴で、だからこそ、きちんとした医療の理念の問い直しも・深化もなしえなかったのです。さらにつけくわえると、731部隊には安倍首相の祖父の岸信介元首相も関わっていたのはなしも出ています。そもそも安倍政権が戦後政治の総決算を掲げて登場してきたこと、また歴史修正主義ということを進めてきたということ、まさにそのようなことの交差するなかでの今回の感染症問題。まさに歴史の背理というようなことです。

#### (5) 経済の論理や国家の論理が優先されてきたこと

さて、今回の検査が進まない理由を考えていると、医療の論理を軸にしたところで進んでいない、対策が一ヶ月遅れたということがとらえられます。その大きな理由はふたつあります。ひとつはオリンピックの期日通りの開催へのこだわりです。これは、巷ではみんなが話していました。ですが、TBSのニュース23に出演して、そのことを問われた小池都知事は、きっぱりと「関係ありません」と言い切りました。ですが、顔色が変わっていました。民衆のほとんど誰もが「関係した」ととらえざるをえないことです。

もうひとつは経済です。もちろん、経済もきちんと考えないと、会社倒産し失業もで、生活が成り立たなくなると自死者もでます。これもひとのいのちに関わることです。ですが、そもそも医療をどうするかを考えないと、経済対策でお金をつぎ込んでも、ざるに水をそそぐようなことになります。まず、医療を医療の論理としてきちんと進めること、その上で経済対策・保障・補償を考えていくことです。

#### (6) まとめ

さて、安倍首相は民主党政権時代を「悪夢の〇年」とか、「実行力のない政権」と批判していました。最近になって言っていないと言い出しましたが、だれもが記憶しています。いつもの大嘘です。確かに安倍首相には実行力がありました。ただし、世論調査で過半数のひとが反対する法案をどんどん強行採決でとおしていきました。わたしがとらえ返すとよけいなこと、悪いことしかしなかったという思いしかありません。

そして今回のコロナウィルスの対策、まさに実行力のなさを示し、やっている感を出すために、実効性のうすい、またひとの気持ちを逆なでするようなことしかやっていません(今号「通信」93号「インターネットへの投稿から」にいろいろ書いています)。

もうひとつ、自粛要請のなかで、テレビで街頭に出ている若者にインタビューをして、「自分たちには関係ない」という発言をする若者をとりあげ、そもそもテレビの取り上げ方にも問題があるのですが、若者たたきをしているひとたちがいます。そもそも、情報の出し方の問題があります。若者は重症化する確率は高齢者よりも低いと言うだけの話なのに、「重症化しない若者が動き回るから感染が広がる」という言い方がテレビで広がっているのです。実際は、サラリーマンのひとたちの感染が広がっているのです。どうみても満員

電車での通勤が感染源になっているとしか思えないのです。

若い人たちのモラルの崩壊という論理は、そもそも若者は大人社会のなかで育っていくのですから、若者のモラルの崩壊が進んでいるとしたら、大人のモラルが崩壊しているという意味で、何をか言わん、の話なのです。そんなことをいっているひとのモラルが崩壊しているのです。

そもそも、この感染症問題でいろいろなデータが上がっているのですが、この間の情報隠蔽、忖度のなかで文書改ざんまで進んだ情報かいざん、情報操作でいったいどこまで信じられるのかという疑心暗鬼が広がっています。

「若者のモラル崩壊」という批判でもうひとつ想起するのは、答弁席から首相が「日教組、日教組」とやじを飛ばしたことです。戦後、戦争の反省から「教え子を二度と戦場には送らない」として頑張っていた日教組の活動を、偏向教育として、右翼と歩調をあわせて叩いたのが自民党右派でした。まさに、安倍首相はその流れのひとです。それで、教育は受験競争の競争原理のなかで、いじめがひろがり、エゴイズムも広がったのです。それを国家主義的な偏向教育で統合しようとしたのですが、そもそも国家主義自体が、戦後民主主義の精算としか言いようのないことで、排外主義の反モラルなのです。だいたい、答弁席からヤジをとばし、なんと注意されても止めようとしない「最高責任者」こそが最もモラルが崩壊しているひとで、そのひとのとりまきのひとたちもモラルが崩壊しているひとで、モラル崩壊が進んでいるとしたら、反対してもモラル崩壊の政権を維持させてしまっている、その責任はみんなにあるのです。そのような反省の上で、このコロナ対策を、ひとりひとりがきちんと情報収集と整理をしつつ、今後はどうつなげていくかを真剣に考えていかねばならないと思っています。

(み)

(「反差別原論」への断章) (21) としても)

## 映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 039

・NHKスペシャル「“パンデミック”との闘い——感染拡大は封じ込められるか——」

### 20.3.22

SNSで話題になっていた番組です。どうして検査態勢が進まないのか、進めようとしていないのか、分からなかったのですが、この番組は国営放送NHKの特権と言えるようなことで対策本部を取材してできた番組で、やっと輪郭がつかめました。

この番組のキーパーソンは、専門家会議のメンバーでクラスター対策班で陣頭指揮をとっている東北大学大学院の押谷仁さん、WHOでサーズ対策に携わったひととのことです。そのひとがインタビューに答えているいろいろ語っていました。

要するにクラスター対策を未だにやっているのです。そもそも、注目されたクルーズ船の入港から、水際作戦ということをやっている、それがクラスター対策として引き継がれ

ているのです。これはクルーズ船の乗員を感染症の対象者にしないで、乗客の世話をさせたとか、症状がでていないひとを別なところにとりあえず隔離するというをしないで、感染者を増やしてしまったという失敗がありました。その後アメリカは、これを教訓化して、クルーズ船を寄港させるときには下船させ隔離する対策をとりました。日本でも、帰国者のチャーター便の対策はうまく行ったようです。ですが、そもそも中国の武漢からの直行便も含めた観光客が日本に来ていて、すでに感染は広がっていたのです。さて、どういうわけか、日本では欧米のような爆発的の重症者や死者の広がりがでていませんでした。なぜ、日本は死者数がそんなに少ないのか、握手とかキスとかハグとか濃厚接触の文化がないとか、マスク文化とか、BCG接種の効果とかいろいろ語られています。

イギリスなどの検査をきちんとしない国も、すぐに切り替え、世界のほとんどの国が検査をちゃんとする方向に方針を変えました。もし、日本で、このまま爆発的の感染がおきなければ、それは幸いなことですが、そもそも押谷さん自身がギリギリのところだとか語っています。これが巧くいったら、日本方式として世界から注目を受けるだろうとかいうようなことを話しているのですが、世界は日本方式は崩壊するだろうとみえています。これは一種のギャンブルのようなことです。政治的などところでギャンブルなんかされたらたまったものではありません。誰が責任をとるのでしょうか？

さて、クラスター対策をしても、検査は検査で別に進めればそれでいいのですが、なぜ、しないのかも分かりません。オリンピック中止（延期）をさけるとか経済的落ち込みをさけるために感染者数を増やさないということがあったのだと思いますが、どうも未だにそれは続いているようなのです。東京都の広報紙では記載が変わっているのですが、どうも未だに、保健所窓口ということが続いていて、「4日—2日」のしびりが亡霊のように生きているようなのです。

検査を増やさない論理として出ていること、ひとつ例を挙げます。

朝日新聞 20. 3. 25「正しく知るPCR検査」で、聖路加国際病院Q Iセンター感染管理マネージャー・看護師坂本史衣さんがインタビューに答えた発言、「ただ、早く見つけても重症化を防げるわけではなく、早く病院へ行くメリットはないのです。」——意味不明で、まさに運命論者のような話なのですが、これは医療の論理ではありません。医療現場では、なんとか救う試みをしているはずで、重症化しないために、早期治療の必要性を訴えているはずなのです。検査を受けないまま亡くなっている現実をどうするのでしょうか？

どうしてこんなおかしな話になっているのかと考えると、わたしは医療の論理のなかに感染症対策の論理が組み込まれないで、「感染症対策」がひとり歩きしているのではないかと思えるのです。この「感染症対策」いかに感染者数と死亡者を抑えるのかという数の論理です。これには、感染研への現場の医療サイドから批判が起きています。医療の論理は、目の前にいる患者さんをどう救うのかという一分の一の論理です。もちろん、医療崩壊がおきると一分の一の死者も増えるから、それを防がなければなりません。しかし、死者の数をふやさないために、検査をしないで亡くなる数がある程度でるのは仕方がない、というのは医療の論理ではなくて、全体主義の発想なのです。そもそも出口をどうするのかというところで解決していくことだという話として現場の医療関係者から提起があり、現実

にやっと動き始めています。どうみても、一ヶ月遅れなのだとしか思えません。感染研も、ちゃんと医療の論理のなかで感染症対策を立て直す必要があるのだと思います。

そもそも情報が錯綜しています。たとえば、「マスクが足りない」という話がでると、「マスクは予防効果はない」とかいう話が出たりします。多分に、政権擁護の専門家サイドの忖度のようなニュアンスさえ出ています。これは、「市販のマスクは移されるのを防ぐ効果ということでは万全ではないけれど、ある程度の効果はあるし、移すということを防ぐ効果はそれなりにある」と言い換えることです。「若年層は重症化しない」というような言い方が出ていました。これは日本でも北海道で20代のひとの重篤化の事例がでていのに、重症化しないという話は誤情報ではないかとわたしは思っていました。きちんと、「確率的には重症化することは少ないことはあるけれど、「若いひとが重症化しない」というのは誤りである」というメッセージに変えることです。また、3密のはなしも、3つの条件がそろわないと大丈夫というような話をするひとがいて、しかも、自粛解除のニュアンスの発言を首相がして、3月の三連休のときに、原宿・渋谷の繁華街が若者が繰り出しました。「3密は3つの条件がそったところが一番危ないということで、1つだけでもうつる可能性がないわけでない」というきちんとした発信に変えることです。とにかく情報の整理と、それからテレビに出て発言するひとはきちんとした発信をすることが必要ですし、誤ったことを言ってしまったときはすぐに訂正なり、翌日自分が出演しないでも、訂正のコメントを寄せることですし、あいまいな誤解される発言をしたときも同じだと思います。そもそも、安倍首相自身が「意味不明の決断」で、誤ったメッセージを出し続けているのですが、きちんとした情報の整理と発信が必要だと考えています。

さて話を番組に戻します。この番組のなかで感染のしくみのはなしがためになりました。飛沫感染、マイクロ飛沫感染（前にエアゾル感染と言っていたこと）、接触感染（飛沫のあとでのそれを接触することによる感染）というようなこと、何に気をつけてどう予防していくのかに参考になる話でした。

もうひとつ有益な話は、台湾の取り組みの話です。

台湾では、中央感染症指揮センターの指揮官陳時中さんが、首相級の権限をもって陣頭指揮にあたり、毎日会見を開き、2時間くらい、質問には全部答えているとのこと。NHKのインタビューに応じて、情報公開と信頼関係が大切だという話になっていました。

学校は、一人出たら学級閉鎖、二人でたら学校休校という明確な方針を立てて、校門のところで非接触式の体温計で熱を測り、教室でもう一回測る、発熱していたら、別の教室に移し、親に電話して旅行の有無とかを尋ねている様子がなががされていました。確かに今回のウィルスでは発症していなくても移す可能性はあるのですが、子どもたちから教育を奪うという弊害と感染のリスクのバランスをとっているようです。オンライン学習とかの試みもなされているようです。また、カードを使ってマスク管理をしていて、一週間に大人三枚子ども五枚配り、アプリなどを使ってコンビニでも受けとれるようにしているとかで、トイレトペーパーの買い占めの防止も、それでやっているようです。

世界はIT時代に入ってきているのだと実感させられました。アベノミクスとか大企業の内部留保を保障して、民衆の生活暮らしを大切にするという観点が欠落している間に、アナログ大国になってしまったようです。

さてカードを使って管理というと、日本でのマイナンバー制度を想起させられます。マイナンバー制度は日本では広がりません。なぜかというと、そもそも金持ち優遇で、タックスヘブンとかの抜け道を塞がないし、累進課税も少なくし法人税も減税し、金持ち大企業優遇を進めているから税に関する民衆の同意も得られないのです。そして、共謀罪とか特定秘密保護法とか国家主義的管理を進めているからです。最期のセフティネットさえ、アクセスを拒むことが続いています。その上に、政府に対して批判的なマスコミへの圧力も続いています。おまけに、コロナウィルスの問題がおきたときは、情報隠蔽・文書改ざん-破棄、歪曲の問題で追及の真っ最中でした。台湾の責任者の情報公開と信頼関係が大切だということの真逆のことを政権がやっていたのです。今、コロナウィルスの問題で大変だから、政府批判を控えようとかいうことを与党側のひとが言っていますが、簡単な解決策があります。「責任をとって首相も議員も辞める」と言っていたことを実行すればいいのです。危機管理は信頼関係がないとなりたちません。それとも、クーデター的に戒厳令でもひいて、戦車でも繰り出すのでしょうか？ そういえば、昔、安倍首相は戦車帽をかぶって嬉しそうに写真をとらせていました。そんなことを想起してしまいました。

今の政権の後手後手の対応や、右往左往をみていると、不安感しか湧いてこないのです。

今、安倍首相ができる最大のことは、首相を辞めて、新しいもう少し信頼を得るひとに首相になってもらって、合意形成のできる、コロナウィルスのちゃんとした感染症対策を進めることだと思っています。

(追記) ここまではだいぶ前に書いた文、この文を編集しているときに、インターネットで、押谷さんをインタビューした映像が流れていました。どうも、「これが巧くいったら、日本方式として世界から注目を受けるだろう」という話は、失敗に終わったと当人も自覚しているようです。それを、まだ検査の不完全さの批判にすり替えていました。その話は、もう不完全でもそれを押さえてやっていくしかないということで、いろんなひとが語っていて、世界ではその方式で進んできているのです。きちんと反省して、方針転換していくことなのに、非を認めないで、まだ、クラスター対策を軸にすることから転換ができていないので、検査がなかなか進まないのです。何が肝要なのか押さええず、名誉心のようなことで動き、責任——反省という概念のなさがなにをもたらすかということを押さえようとしないことが、安倍政権に関わるひとの特徴になっているのでしょうか？

## インターネットへの投稿から

### 2020.4.4 アベノマスク

アベノマスクの話です。安倍首相が各世帯に布製のマスク2枚を配るということを発表しました。で、今までマスクをしていなかった閣僚たちが全員マスク姿になっていたのですが、安倍首相のマスクだけ、どうもその布製のマスクのようで、他のひとたちと違うのです。しかも、確かマスクは顎が出ないようなマスクを使うようにという話があったと記憶しているのですが、顎が出ているのです。またWHOが布製のマスクは推奨されないとしているという話も流れています。ちょうどその話が出たのが4月1日で何かの冗談だろうという話にもなっていました。ちょうどその日にテレビで出ていた自民党の医者でもあ

る議員が、「わたしがいたらその話は止めた」とまで言い切っていました。まるで裸の王様のように世界の笑いものになっているようです。

わたしはひとつの言動には情報ということが含まれていて、その情報は正しくきちんと発信していかななくてはならないと思うのです。マスクが足りないのなら、それなりに使えるちゃんとしたマスクの製造を促すように働きかけをすればいいのです。台湾のように一回だけでなくきちんとマスクを配布するシステムをつくらばいいのです。何かやっている感を出すために思いつきで動く、そんなことを何回繰り返せばいいのでしょうか。

問題は首相がおかしなことをすると、この国にはそのことを擁護するような付度発言がでてくるということがあります。情報をきちんと押さえ分析し、発信していくことがいまこそとわれているのです。もっとも、安倍政権には「情報」という言葉は禁句になっているのかもしれませんが。

#### 2020.4.14 安倍首相のコラボ

テレビでオーケストラのバイオリストがインターネットを通じたコラボをやっている映像が流れていました。しばらくしてミュージシャンがインターネットで自分のギターの弾き語りや歌と踊りでコラボを訴えていた映像が流れていたと思ったら、それに応えているパフォーマーたちが応えている映像も流れていました。みんな、生業が困難になったフリーランス的なひとたちで、元気に乗り切っていこうというメッセージが込められているのだとみていました。で、なんと安倍首相がそのコラボという意味か、犬と遊び、**マグカップの飲み物**をまったりと飲み、まったりと読書し、テレビのチャンネルを変えている、映像を流していました。

驚愕しました。なんという政治的感性のかけらもないひとなのでしょう。

安倍首相は、政治をパフォーマンスと考えてコラボしたのでしょうか？

どうも「家にいようー」というメッセージのようなのでしょうか、それならばテレワークをすると宣言して、家で執務をとっている姿を流すことです。緊急事態宣言を出した本人が、家でまったりしている映像などなんで流せるのでしょうか？ 感染症対策で必死になって動いているたくさんのひとがいて、コロナウィルスに感染する恐れと、これからの生活がどうなるかと不安でいっぱいになっているひとが大勢いるなかで、生活に余裕のあるまったりとした生活ぶりの映像を流すセンスは驚きを通り越して怒りしかありません。

別にまったりとした生活ができるのならすればいいのです。そういう生活をしたいのなら、自分が以前宣言したように「首相も議員も辞める」ことを実行して、家にじっといて欲しいものです。

#### 2020.4.14 安倍首相の辞書の「責任」

ナポレオンの「わたしの辞書には不可能の文字はない」ということばから安倍首相の辞書の「責任」という項目を想起していました。

##### 責任

- ① 名誉に関わることば。用例：「責任ある地位」「最高責任者はわたしだ」
- ② 過去の為政者にあり、現在は消えた意味。用例：「責任を負う」「責任を取る」



## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 93 号」アップ(20/4/18)
- ◆「反差別資料室 A」を新しくつくりました。A はアーカイブです。「吃音」に関することや、フェミニズム関係の学習をしていたときの文や障害問題で論形成をしていっていた時の論攷を載せています。論的な深化を軸にしている今よりも分かりやすくなっているかもしれません。参考にしてください。
- ◆サブホームページ「反差別資料室 C」の文献表を、昨年度末までに新しく購入した本、読書した本の文献表を入れ込み、リニューアルしました。「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。案内の文を少し読みやすくしました。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も PDF で文書を貼り付けているのですが、貼り付けた時には読めていたのが、「Forbidden」(「禁止された」となっているところがあります。いろいろ試行錯誤しているのですが、まだ解決していません。とりあえず、読んでもらえる方はメール添付か、場合によって DVD などの他のメディアの郵送などで対処します。横書き版は最後、縦書き版では 2P の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆母の介護の反省記「ソフトクリムのようなウンコの話—母の介護の記録と反省から介護労苦論批判のために—」をアップしました。表題も含め、まだ迷い続けているのですが、いろんな意味で必要性を考えとりあえずのアップです。

## 読書メモ

今回はレーニンの『哲学ノート』です。実は、ここまでレーニン学習を拓げるつもりはなかったのですが、ブログ 447・張一兵『マルクスへ帰れ—経済学的コンテクストにおける哲学的言説』情況出版 2013、この張一兵さんの本を読んだのは、張さんが廣松物象化論をとりあげ中国で廣松さんの著作の翻訳など進めている関係があったのですが、わたしは張さんは廣松さんをきちんと読み込めていないという思いをいただいているのですが、ともかく、この著者は、思想——哲学を総体的にとらえ返そうと、「帰れ」シリーズで、つぎつぎに意欲的に本を出しています。その 2 冊目が『レーニンに帰れ』で、ここで取り上げているのが、レーニンの『哲学ノート』なのです。いわば、張さんのこの本を読むために、『哲学ノート』を読んだとも言えることで、だから、一緒に読書メモを掲載するつもりだったのですが、こここのところのコロナウィルス関係のインターネット関係の読み込みや投稿をしていて、すっかり本が読めなくなっていました。で、張さんの本はまだ読書途中です。だから、「通信」の発刊日を遅らせることも考えたのですが、これから月一に戻すとしても、そもそも 18 日発刊が基本なので、張さんの本の読書メモは切り離してしまいました。

たわしの読書メモ・・・ブログ 530

### ・レーニン『哲学ノート 上・下』岩波書店(岩波文庫) 1975

これはまさにノートというより、メモのようなこと、ちゃんとした本にはなっていないこと、でもこれを、レーニンがとりあげている原典にあたりながら丁寧に読み解いていく

と、吸収できることが多いのですが、とてもそこまでやれません。簡単なメモに留めます。

さて、簡単な見取り図のようなことを示してみます。

### <上>

これは、一冊まるごと「ヘーゲル『論理学』にかんするノート」です。

ヘーゲル『論理学』は、『大論理学』として出されているもの、そして、『エンチクロペディー』のなかの「論理学」、「自然哲学」「精神哲学」とセットになった「論理学」——『小論理学』と言われているものがあります。レーニンは、この『大論理学』に書かれているものを『小論理学』で検証しつつ、ノートを作っています。さて、レーニンはヘーゲルからヘーゲル弁証法を学びつつ、その客観主義的観念論をマルクス——エンゲルスにならって、逆立ちしているとして客観主義的、弁証法的唯物論を突き出します。その過程で、主観主義的観念論と批判しているカントの流れの不可知論者の批判もしています。さて、問題なのは逆立ちしているというとらえ返しだけではすまないということです。ヘーゲル弁証法は、存在論と認識論と論理学の三位一体的な弁証法なのです。ここで、存在論というのは、絶対精神の自己展開、疎外とか外化とか言われていることで、その批判をせねばなりません。このあたりは、近代哲学の陥ったアポリア（論難）の三項図式をどうとらえ、どう止揚していくのかが問われているのです。そのあたりのことが押さえられないところで、また後期エンゲルスは、マルクス理論のわかりやすい解説を試みるなかで、弁証法を図式化していくなかで弁証法を法則としてとらえ、反映論に陥りました。ヘーゲルの三位一体的弁証法への陥穽です。そしてまさに革命のひと、レーニンはそのエンゲルスの継承のなかで法則の絶対的真理を突き出しました。これでは、絶対精神へのとりこまれで、唯物論ではなく観念論に陥るのです。だから、その後の「マルクス—レーニン主義」の流れの運動は、ひとの名を冠したカリスマ性にひきづられる〇〇主義が陥る教条主義にとらわれ、まさに宗派的な活動に落ち込んでいったのです。このあたりが「共産主義的運動」の総括の核心のひとつとしてあることです。これについては、「社会変革への途」の主題になること、そちらでまた書きます。レーニンのこの<上>だけでなく、<下>をも貫いて、唯物論と弁証法についての論攷を進めています。哲学で体系的な論述を進めたのは、アリストテレスにはじまり、カント、ヘーゲルと続いています。マルクスにもそのような指向はあったようなのですが、結局経済学に軸を移し、まとまった論攷をのこしていません。わたしが認識論的に導かれた廣松渉さんが、『存在と意味』でそのような試みをしていましたが、三巻中二巻まで発刊したところで、亡くなっています。今後、そのような試みがでてくるのでしょうか？

さて、切り抜きメモですが、メモの切り抜きメモはあまり意味がないので、さらっと、次の張さんの『レーニンへ帰れ』の学習に役立つ、検索性のメモに留めます。

*絶対精神の自己展開としての、存在論と認識論と論理学の三位一体性としてのヘーゲル弁証法* 21P

ヘーゲル「網」「結び目」 21P——レーニン「網」「網の目」 22P・・・廣松さんの「網」と「網の目」はここから？

*論理展開と現実展開（存在論的展開）の同一性* 24P

*「運動の弁証法」「否定」の弁証法* 28P

レーニン「(一)天—自然—精神。天をすてよ、そうしたら唯物論になる。」 35P・・・絶対精神とその自己展開、そして絶対的なるもの(絶対的真理)をすてないと唯物論にはならない。

レーニン「ヘーゲルは逆立ちした唯物論(エンゲルスによると)であるから。すなわち、わたしは神とか、絶対者とか、純粋理念とかを大部分なげすてる。」 37P・・・ただし、絶対的真理はなげすてなかった。

「哲学を「自我」から始めることはできない。「客観的運動(七一ページ)」がないから」 38P・・・客観的運動は絶対精神に至るのでは？

レーニン「物質的な過程の全面性およびこの過程の統一性を反映すると、それは弁証法であり、世界の不断の発展の正しい反映である。」 49P・・・絶対精神の自己展開としてのヘーゲル弁証法の反映論

レーニン「石でさえ進化する」 50P・・・？意味不明

矛盾の動態 96P

レーニン「本質的区別—対立」「生動態」 97

レーニンの注釈「同義反復の意味」 101P

「法則とは現象における恒久的なもの(永続するもの)である。」 111P・・・法則は、共同主観的に妥当するとされた真理に基づく仮説に過ぎないこと

レーニン「あらゆる法則は、せまくて、不完全で、近似的なものなのである。」 112P・・・前ページの引用と矛盾

ヘーゲル「かくして法則とは本質的な関係である」 115P・・・構築主義的立場からする反本質主義との対話

レーニン「フェイエルバッハはこれに「結びついている」。神を去れ、すれば自然が残る。」 119P・・・神は自然の物神化。自然の物象化は残る。

レーニン「ひっくりかえすこと——概念は、物質の最高の産物である頭脳の最高の産物である。」 135P・・・医学モデル。脳一元論——脳の中にある小さな自己論。概念は共同主観的なところから生まれていくことを押さえていない。

レーニン「ヘーゲルはカントの観念論を、主観的観念論から客観的および絶対的観念論へ高めている」 137P・・・絶対的観念論へは「高める」のではなく、「おとしめる」こと。マッハは相対的観念論と唯物論のとの間のゆらぎでは？

ヘーゲル「悟性」 138P・・・悟性とは、実体化された「自我」のなかに内自有化された「(自己)意識」

レーニン「「概念」はまだ最高の概念ではない。より高いものは理念=概念と実在との統一である。」 139P・・・理念とは共同主観的に妥当し反照された意識。「概念と実在との統一」は、実体主義と絶対化を生み出す。

ヘーゲルのカント批判 142P・・・先験的演繹論を共同主観性論からとらえなおす

ヘーゲルの「純粋な真理」 146P・・・絶対精神の自己展開——疎外・外化の弁証法

レーニン「マルクスは、ヘーゲルの弁証法を、その合理的な形で経済学に適用した。」 153P・・・「法則」の適用なのか、論理学的高次化なのか

レーニン「概念の弁証法」 196P・・・対話による高次化

レーニン「ヘーゲルにおいては、実践が鎖の一環として、しかも客観的（ヘーゲルでは「絶対的真理」）への移行として、認識過程の分析にうちに位置をしまっているということである。」203P・・・ここでは、「客観的」と「絶対的」を分けている。

レーニン、弁証法の諸要素——概略3つ 217P

レーニン、弁証法の諸要素——精細16個 218-9P

レーニン「エンゲルスがヘーゲルの体系は逆立ちさせられた唯物論であると言ったのは正しい。」237P——注一〇九『フェイルバッハ論』の第二章で・・・」285P

レーニン「ヘーゲルのもっとも観念論的な著作のうちには、観念論がもっとも少なく、唯物論がもっとも多いということである。これは「矛盾している」が、事実である！」238P

<下>

もくじを挙げておきます。

「ヘーゲル『歴史哲学講義』にかんするノート」

「ヘーゲル『哲学史講義』にかんするノート」

「ヘーゲル弁証法（論理学）の見取図」

「ラッサール『エフェソスの暗い人ヘラクレイトスの哲学』にかんするノート」

「アリストテレス『形而上学』にかんするノート」

「フェイエルバッハ『ライプニッツ哲学の叙述、展開、および批判』にかんするノート」

「弁証法の問題によせて」

「フェイエルバッハ『宗教の本質についての抗議』にかんするノート」

「マルクス、エンゲルス『神聖家族』にかんするノート」

ちょっとだけコメントを、「ヘーゲル『哲学史講義』にかんするノート」は、ギリシャ哲学にかんするヘーゲルの論攷とそれに対するレーニンのメモです。エピクロスの弁証法や詭弁学派のむしろ弁証術とでも言えるようなこと、むしろ対話という意味での弁証法から、ヘーゲルの弁証法にいたる過程をなぞることができるかもしれません。ギリシャ哲学には、その後の哲学的展開の縮図があるとされています。ギリシャ哲学に関しては、わたしは、シュヴェーグラー『西洋哲学史（上）（下）』岩波文庫で読みました。ヘーゲルと対比させたいという思いが湧いてきますが、とても無理です。縮図といえば、青年ヘーゲル派の内部論争が、まさに哲学の縮図にもなっていると言われています。ここで、フェイエルバッハにかんする2つのノートと、『神聖家族』でマルクス——エンゲルスのバウアー兄弟とその流れのひとたちへの批判をとりあげています。わたしもヘーゲルまではなぞって、その後青年ヘーゲル派の本と内部論争は、本だけ買って読めずしまいで、廣松渉さんの膨大な論攷をわたしなりに押さえただけに留まっています。とても、原典の訳書までは読めないにしても、これも「廣松ノート」を作るなかで再学習したいと思っています。

ここ<下>でも<上>と同じようにメモを。

理性の狡知 26P

ヘーゲル「ここに（エレア学派）に弁証法の始め、・・・・・・」38P

レーニン「弁証法とは、一般的には、「概念における思考の純粋な運動」である」「特殊的には（ヘーゲル独特には）、弁証法とは、物自身、本質、実体と現象、「向他有」との対立の研究である」「本質は現象する。現象は本質的である。」39P「本来の意味においては、

弁証法とは、対象本質そのものにおける矛盾の研究である。」40P・・・論理学、認識論というところでの弁証法から、存在論までに拡大したヘーゲルの弁証法。

2つの弁証法 41-2P

「概念の弁証法および認識の弁証法」 43P

ゼノンの弁証法 45P・・・弁証術、エンゲルスのりんごの例え、ただ「ひとはそれを知らずに行う」の類い

レーニンのヘーゲルを通したマッハ批判63P・・・ただ批判がずれている

キュレネ学派とマッハの近さ 82P

レーニン「外部に」なら、唯物論。「内部に」＝観念論。ヘーゲルはアリストテレスの「外部に」という言葉に黙殺し、「受動性」という言葉によってこの外部にという言葉に別の意味に書き換えたのだ。つまり、受動性とはまさに外部にという意味だとするのである!!ヘーゲルは、感覚の観念論を思考の観念論におきかえているが、観念論に変わりはない。」98P・・・外部——内部という設定の問題、間主観性——共同主観性の問題。

ヘーゲル「感覚が外部にあるかわたしのうちにあるかは、どうでもいいことで、それは存在するのである……」—レーニン「唯物論からの言いのがれだ」98P・・・外部—内部の設定自体の問題、感覚の文化による規定性の問題も、レーニンのおかしさ

レーニン「弁証法的唯物論だけが「始め」を続け（ママ・・・文が繋がっていない）および終りと結びつけたのである。」106P・・・ヘーゲルのエピクロスとアリストテレス、およびレーニンのヘーゲル批判

「トロポイ—論式」 120P

「ライプニッツがスピノザとちがう点は、ライプニッツにおいては、実体の概念に力の概念が加わること、・・・」176P

フェイエルバッハ 204-32P・・・自然——神、物神化

フェイエルバッハ「自然を神から導きだすのは、原型を模写、模像から導きだし、事物をその事物の思想から導きだそうとするに等しい。」「人間には「物をさかさまに見ること」抽象的なものを独立のものとするのがつきものである——例えば時間と空間。」「諸事物が空間と時間を前提とするのでなく、空間と時間が諸事物を前提とするのである。」214P

フェイエルバッハ「自分の本質を非我の自我と自我のない非我に分裂させ、前者を神と呼び、後者を自然と呼ぶ。」227P・・・他我——共同主観性がない、物神化の問題も

唯物論者の歴史 261-6P

「反差別原論」への断章」(22)

## 6つの安全保障問題——コロナウィルス・感染症の緊急事態宣言を含む特別措置法制定を契機に考えていること——

表題をみて、途中まで読んで止めるひとがいるといけないので、誤解のないように最初を書いておきますが、今世間で安全保障といわれることを6つのこととしてとりあげたことで、この世間の常識のようなことを最後にひっくり返します。とりあえずのとりあげです。

今、コロナウィルスの感染症対策で、最初から憲法改正の緊急事態条項創設に結び付けるような話が出ていました。それは、結局緊急事態宣言を含む、措置法作りまで進みました。これは二〇一五年戦争法案——安全保障関連法案改正が憲法9条改正の地ならしという意味を持たせようとしたのと同じ位相にあるのではと思っています。

そもそも感染症対策は、安全保障という概念でくくることではないのかもしれませんが、あえて、むしろ相手側の、はっきりいえば国家主義者の安全保障概念に乗って、それをひっくり返す作業を試みます。

ここで6つの安全保障とは、6つの対策・政策として示し得ます。それぞれつながりがあり、はっきりとわけてとらえることではないのですが、あえて6つとして提示してみます。それは、①軍事②治安③感染症④環境(問題)⑤災害⑥福祉です。

安全保障ということは、一般に①②を指しているようです。アメリカなどは、①軍事の生物化学兵器対策ということも含んで、③の感染症対策を安全保障のなかに組み込んでいくようです。そもそも、国家というところで抱え込んでいる民衆(「国民」)の安全保障ということは、民衆のいのちと生活を守るという観点では、当然、環境問題、災害対策、福祉ということも含まれます。

このことを考えていると、俳優の菅原文太さんの沖縄での遺言のようなスピーチ(\*1)とリンクしていきます。「政治の役割は二つあります／ひとつは、国民を飢えさせないこと／安全な食べ物を食べさせること(拍手)／もうひとつは、これは最も大事です／絶対に戦争をしないこと(拍手)」、この演説は①軍事と⑥福祉、そして④環境(問題)を見据えています。

さて、アベ政治が続くなかで、この根源的なとらえ返しをしていくと、その性格がはっきりしてきます。それは「国家主義」ということです。そして、国家主義者は、6つの安全保障で優先順位を①から⑥へ考えていきます。民主主義(\*2)の立場からすると、逆に、⑥から①に進みます(こちらは、必ずしも順番通りにはなりません。というより順位付けされることではないのです)。そして、①の内容を、「平和外交政策」——(菅原文太さんの)「絶対に戦争をしないこと」と置き換え、必ずしも後にすることではないこととします。それは、「憲法9条を世界の憲章に、一切の軍事同盟を破棄し、軍隊のない世界を作って行こう」というように表せます。

そして、②治安も、⑥福祉がアベ政治では切り捨てられ、押さえ込まれているのですが、格差や貧困をなくしていくことが、「犯罪」などをなくしていくことにつながる、と押さええます。

国家主義的な狭い意味での安全保障は、①の軍事的なところが、正面戦から対テロ戦争という形態に重心が移動し②の治安という側面が強くなっていきます。そういうところで、日本でも起きたサリン事件という生物化学兵器のようなことと絡んで③の問題が浮かび上がってきます。

今回の、コロナウィルスの感染症対策でとらえられることがあります。それは、こういふときに「安全保障」ということが出てくるのですが、そもそも安全保障というところで、きちんとシミュレーションをし、対策をとっているかという話です。起きてから、ベッドが足りないとか(医療崩壊が起きるから検査件数で調整している事態さえあるようなので

す)、マスクが足りないとか(中国から8割以上を輸入していて、国内の生産がおいつかないとか)、地域の相談の最前線になっている保健所が統合で半数になっているとか、病院でかかりつけの患者と感染者の導線が分けられていないとか、そんな話が、感染症が起きてから議論されています。そもそも他の安全保障の問題でも同様です。①の軍事のシミュレーション、核保有国で、核爆弾を保有している場所をどの国も明らかにしていません。ところが、原子力発電所の場所は誰でも知っています。本当に安全保障を考えているのなら、原発など直ちに廃棄することです。④環境⑤災害という面でもフクシマで実際にもう起きたのに、まだ再稼働をし、原発をベース電源ということから外そうとしません。フクシマが起きたときに、責任回避のために、「想定外」という言葉がごまかしの呪文のように出ていました。そもそも、想定が間違えていたという話です。安全保障とは、想定を正しくするということです。しかも、後の裁判などで、想定していたのに、お金がかかるからとやらなかったということが明らかになりました。

そして、パニックが起きないようにとかいうことで、政府がやっている措置を専門家が付度・補完するような発言も出ています。パニックが起きるのは、きちんと情報分析し対策をきちんとやって、それをきちんと説明し広めていくことが肝心なのです。ところが、今の政権になって、そもそも情報隠蔽・歪曲・操作を繰り返し、公文書を破棄し、改ざんさえしています。そういうなかで、政府が何か情報操作している、と考えない方が不思議なのです。

そもそも、きちんと安全保障でシミュレーションさえきちんとできていない状況をとらえると、これは体制——政権を維持し、憲法改正などのやりたいことをやるために、安全保障の問題をもちだす、国家主義的な意図を感じざるを得ないのです。

そもそも、国家主義者はあちこちに現れています。アメリカのトランプ政権の支持基盤とされるティパーティ、キリスト教福音派(さすがに、このなかでトランプ批判も起きているようです)、そして日本では「日本会議」という団体が安倍政治の支持基盤としてあり、そこに属する議員が、「国家のために死ぬる国民のための教育を」ということを話していたことを想起せざるを得ないのです。

この「安全保障」の問題の根底には、国が民衆の上に立つのか、民衆主権で、もし国が必要としても、あくまで、ひとりひとりのいのちと生活を守るということを最優先にするという話で、その政治のはずです。何か、「安全保障」というところで、取り違えが起きているとしか思えないのです。そういうなかで、今回のコロナウィルスの問題も起きているのです。人類を滅ぼすのは細菌かウイルスかもしれないという話も出ています。

TBSBSの「報道1930」で、成立した今年度の予算のなかで感染症のベット数を削減するとなっているとのが出ていました。政権が財務省の作った予算案の野党の書きかえ要求に、補正予算で対応すると応じなかったことからする、笑えない笑い話です。そもそも、安全保障のシミュレーションがなくなっていたことのまさに証左です。

まとめてみます。あえて、6つの安全保障というように突き出しましたが、実は、軍事の問題は、「憲法9条を世界の憲章に、一切の軍事同盟を破棄し、核や軍隊のないことをめざす」平和外交の問題ですし、治安の問題は、格差や貧困、差別のない社会を作ることに、犯罪をなくしていく、政治と福祉の問題(\*3)ですし、感染症の問題は、実は環境の

問題とつながり生活様式を見直し、ひとりひとりがいのちと生活を大切にしていこうとくみですし、災害の問題も、実は環境保全の問題とつながり、環境保全とよりよい環境を作っていくなかで、災害が起きときに被害が広がる、原発などのあぶないものをただちに廃止していくとくみとつながっていきます。そして、社会のしくみから、変えていくことによって、ひとのいのちと生活を一番にすえた基本生活保障ということを作っていくこと。それらのことが、そもそもトータルな福祉といえることに収束していくことです。

#### 註

1 菅原文太さんの演説全文、わたしがテープ起こししたものを、以前「通信」にアップしたのですが、今回ホームページの仮置き場に掲載しておきます。

[https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e\\_9bec98da9f6e47f39269d0e64e96d8de.pdf](https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e_9bec98da9f6e47f39269d0e64e96d8de.pdf) しばらくして消します。

2 わたしは長らく民主主義批判をしてきました。エンゲルスの「民主主義とは、支配の形態の一つである」というテーゼの流れからですが、現在の「民主主義」は封建的王制や専制政治や全体主義に対峙するものとして置かれていること、それが議会制民主主義が、民衆のいのちや生活を守るところで機能していない、そもそも機能していないというしくみからそういう批判が出ています。しかし、わたしは国家主義に対峙する、民衆のいのちと生活を一番に考えるという意味で、「民主主義」——民衆主義が必要なのだと思います。

3 政治と福祉の関係ですが、以前「障害者」関係団体の雑誌で、「福祉とはなにか」というようなテーマで、いろんな「障害者」にアンケートをしていて、わたしもそれに答えた文を載せてもらいました。そのなかで、「将来福祉はどうなるか」ということで、短文を書きました。今、そのことをとらえ返せば、「基本生活保障という制度をつくれば、(個別の)福祉ということは消えていくか、逆に、政治が福祉という概念に包括されて、役所が福祉所ということに変わっていく。」ということになるのではと考えています。

#### (編集後記)

◆月二回発刊が続いています。今回は読書メモが少なくなったので、少し分量が減って読みやすくなっています。読書メモ以外は、コロナウィルス特集のようになっています。次回は、月一に戻して、5月18日発刊予定です。文が溜まったら間に挟むかもしれません。

◆今回の巻頭言、実は巻末に載せたものを掲載する予定だったのですが、前回に書ききれなかったことを追加して書きました。医療政策総体からとらえ返したことです。

◆「映像鑑賞メモ」は、いつもは「読書メモ」の後ろに置いていたのですが、コロナウィルス問題とリンクしているので先に回しました。

かなり脱線してしまいました。コロナウィルス感染症の問題でいろいろ考え、医療の論理できちんと進めていくという話は、まさに政治の論理批判につながっていくのだと考えていました。社会変革の運動自体が、社会を変えるためにはひとのいのちで犠牲がでることもやむを得ないというような論理で進めていたのですが、確かに、そのような局面も出てはくるのですが、それでもそのような論理におちいることを避け、きちんとひとのいのち



ちと生活を思うような運動として進めていくことこそが必要なのだと思うのです。まさに政治を否定する政治のジレンマなのです。実践的に解決していくしかないのです。そこで肝要なのは、自らの政治を担うことの痛みなのです。

◆「インターネットへの投稿から」も「読書メモ」の前に置きました。論理性のかけらもないひとの批判をしていくのは、ほんとに消耗でつかれるのですが、家にいてくれないので、わたしも批判を書いて運動作り・世論作りの一端を担わなければなりません。

◆「読書メモ」は、この「編集後記」の「映像鑑賞メモ」の最期に書いたこととリンクしていきます。レーニンの第三次学習の最期、もうひとつ、張さんの『レーニンに帰れ』の本があり、今読書中なのですが間に合いませんでした。レーニンは、まさに19世紀後半から20世紀前半の革命を担ったひとで、しかも論争のために哲学にまで踏み込んだひとで、そのエネルギーには感嘆するのですが、感嘆しつつ、きちんととらえ返しをしていきたいとの学習とそのメモです。

◆「社会変革への途」は、今回はお休みです。

## 反障害—反差別研究会

### ■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>